



根深ねぎの、白い部分はざくざくと、青い部分はさっくりと。横断幕やプラカードを掲げた群衆を映し出すワイドショーを目の隅に感じながら、包丁を動かす。

生姜は薄く。ねぎと生姜を臭み消しに、厚めに切った三枚肉を、水と酒で煮る。八角も買っておけばよかったと思いながら、浮いてくる灰汁を掬う。周辺の木々であれだけ騒いでいたセミは、もう鳴かない。代わりでもなかろうが、通り向いの空き地には数日前から重機が入り、毎日賑やかに動いている。

「あっちゃん、自分のことはもうほとんどできなくて」

母が唐突に、幼馴染で同級生の噂話を始めた。視線はテレビのシュプレヒコールから離さない。智美は台所の壁をにらんだ。何度も繰り返すから、次のセリフは分かっている。

「旦那さんは心臓で倒れて」

ほら、ビンゴ。そして次は、

「肝心の息子は親の面倒みようともしないし」

当たり。切り替わった画面では、議事堂内でもみ合うセンセイ方の脂ぎった怒号罵声の阿鼻叫喚だ。せんべいの袋を開けて母は茶をひとくちすすり、台所に向かって、あんたも座らんねと声をかけてくる。

豚の角煮は、入院中の娘からのリクエストだ。今日は土曜日で、外泊許可が下りている。早めに仕上げ、約束の時間前には病院に到着したい。

「ほら、お父さんの釣り友達の、飯田さん」

田ではなく島だと訂正するのも面倒くさくて横顔で頷くと、母はまた、定番のひとつを始める。

「病院でたまに会うのよ。娘さん、足が悪くてね。飯田さんが、足が痛かるとに働かなきゃならんのか、俺の年金では暮らせんのかって言うのに、やっぱりスーパーのパートに行くんだって」

飯島氏の、未婚のまま還暦の声を聞こうという娘が受ける足の手術に話が及んだところで、母は「かわいそうに」と茶をすすった。御浸し用のハウレンソウを湯から取り上げると、角煮の火を細くして、智美も湯呑を持って席に着いた。さらに替わってテレビショッピング。昔のアイドルが美容器具を喧伝する途中で、母はリモコンを使いスイッチを切った。とたんに、工事現場からの騒音が響きわたる。あれは何が出来るのか。聞いてくる口の端にせんべいのかけらが付いている。急須の茶は、智美好みに冷えていた。

空き地にはつい先月まで、夏野菜が茂っていた。ある晴れた日に大型の重機がやってきて、掘ったり盛ったりをはじめ、今や横長の型枠が組まれようとしている。単身者用アパートくらいはできそうな面積だ。智美の推測をよそにして、母は、今度は質問に入る。

「駅の裏にいた、ほら、あんたの友達」

うん。あえて名前は出さない。友達の友達という程度の親しさだった彼女の消息など、知りもしない。

「子供さん、事故で死んだんだよね。小学校の帰りに」

昔むかし、豊かな家族がありました。

昔むかし、すべてに優秀な美しい娘がいました。

昔むかし、手広い商いで繁盛する家がありました。

母の寓話は、いつも不幸で終わる。

「でも、私はおかげさまでまだ働けているし、孫たちはみんなヨカ子だしね。昨日も……」

話は途中だったが、智美は壁掛け時計を見上げると、母を促し立ち上がった。いちこを迎えに行く時間だった。

いちこの髪は、入院してますます脂浮きが目立つようになった。

洗っているのか訊ねると、洗っているよとむくれる。どんなふうにと問いただせば、ますます口元はねじ曲がる。それで智美は、娘が外泊で戻るたびに頭を洗ってやることにした。先に風呂へ入り、体も頭も洗い終えてからいちこを呼ぶ。自分が湯船で温まるあいだに体を洗わせ、交代し湯船に浸からせながら頭を預かって洗う。

いちこの髪は、黒くて深い。母が「ずるんずるん」と表現するとおり、重い艶に濡れている。多く脂を分泌するせいで、あきれくらいにシャンプーが効かない。二度三度と洗いをかけて、ようやく泡が立ってくる。

「清潔にせんと、看護師さんたちに嫌われるよ」

指に揉まれる頭の持ち主は、人に嫌われることを極端に恐れている。頭を乗せた色白の腕には、無数の傷跡が浅く深く走っている。

「気持ちよく暮らさなきゃね。自分のためだけじゃない、ひと様のためでもあるんだから」

頷きも待たずにシャワーで洗い流す。水音のしたから「ごめんなさい」が聞こえる。謝るくらいなら、ちゃんと自分で洗ってくれよ。毎日のことなのだから。毎日、一生続けなければならないことなのだから。私が生きている間も、死んだあとも。いなくなったあともずっと。

一痴れた感傷で鼻の奥が痛んでも、娘には気取られたくない。半乾きの冷えた背中にかけてのありがとうにどういたしましてを返し、智美は風呂を出た。

リビングでは、母が相変わらずテレビを観ていた。座っているのは古道具屋で買った七十年代風の布張り椅子だ。智美は古道具が好きだった。アンティークは敷居が高いが、古道具なら敷居も値段もパート事務員の分に合う。錆の浮いたホウロウ、ラッカーの剥げた木製品に魅かれた。

「いっちゃんは。まだお風呂ね」

「頭洗って置いてきた」

「やっぱり洗ってやらんとダメね」

「汚いんだもの。どれだけ言い聞かせても、ろくに洗わないし」

母から嘲りに似た笑いが起こる。智美は眉間を重くして台所に立ち、焼酎のお湯割りを飲もうとやかんを火にかけた。母といちこにはココアが良かろう。マグカップを二つ用意する。体は台所で動いているが、気持ちはバッグの中の携帯電話へと飛んでいる。康一からメールが届いているはずだ。こんばんはで始まって、職場であったことや駅から自宅までの間にあるという弁当屋のことを書き送ってきているだろう。いつもの明るい文面で。

風呂場のドアが開いて、いちこが洗面所に出る気配がした。ドアを閉じるバスタオルを取る服を着ける。立てる物音がいちいち手荒すぎて、ついため息が出るのに気づいた母までがため息を漏らすから、さらにため息が後を追う。一人になりたい。どこかへ行きたいと思う。

「お母さん」

予想どおり、洗い髪で肩を濡らしていちこがやってきた。そして、予想どおりのセリフを吐く。

「アイス食べてもいいかな」

自分の腹具合なんだから、自分で決めなさい。言いたいのを我慢して、頭を拭いてやる。タオルはあっという間に水浸しになるから、智美はまた繰り返す。

「ちゃんと乾かさなきゃ気持ち悪いでしょう。濡れたままだと臭くなるんだよ。頭が臭いと嫌われるよ。風邪だってひくし、風邪ひいたらデイケアにも参加できなくなるでしょう」

ココアは母の分だけでよくなった。焼酎を作った残り湯をポットに入れておくと、アイスの棒を啜りたいちこがやってきた。そのお湯でカップラーメンを食べていいか。これも予想通りではあった。

「ラーメンを食べるって。晩御飯をたくさん食べたがね」

母が笑う。空気をごまかすように、聞かなかつた、なかつたことにしてやるよというふうな笑いを、いちこは嫌った。ふくれっ面に智美は声をかけてやる。

「いっちゃん、おにぎりにしようか」

「お母さんのおにぎり」

「うん」

「お願いします」

そこでまた母が笑うから、治りかけた機嫌はまた元戻りだし、いつまで経ってもバッグのなかから携帯電話を取り出せなくて、智美はじり、と眉間を重くする。

小さめのおにぎり二個に好物のべったら漬物を添えて席に着かせると、智美もようやく座ることができた。お湯割りの焼酎はすっかり冷めてしまっていて、芋独特の臭みが際立つ。おつまみにどうぞとおにぎりを差し出されたが、それを丁重にお断りして、智美は携帯電話を手にした。康一からのメールには、黒い容器に美しく盛られたハンバーグの画像が添付されていた。人参のシャトー、きつね色のジャガイモや茹でインゲンを従えて、溶けたチーズを身にまとっている。隣には同じくプラ容器入りのサラダ。今夜はいつもの弁当屋でなく、デパ地下で調達したようだ。もう一枚の添付写真には、ブリキ製品と思しきトラックが映っている。

「新しい戦利品。フリーマーケットで見つけました」

丸顔眼鏡の康一を思い出して和んでいるところに、横から母が昨日も聞いたことを聞いてきた。

「あんた、仕事はいつまでね」

「今月末まで」

智美は市役所で臨時職員を務めていた。そろそろちょうど一年になる。

「後は働けんのね」

「そういう決まりなの。一年働いたら半年休む。その間に失業保険をもらって、後は短期のアルバイトとかして。次も履歴書を出しておくよ、空きがあるときに連絡がくるのよ」

「月末なんて、もう何日もないが。どこか長く働けるところはないもんかね」

欠伸が出た。ココアも飲み終えたようだ。指についた飯粒をなぶっているいちこに就寝前の薬を飲むよう指示し、コップを持って立ち上がったとき、智美はふと、口にしていた。

「就活ついでに婚活もしようかな」

笑いが足元を掬う。呪文が体を這い上がる。

「もう遅かが」

母はリモコンを智美に向けると、非情な勢いで電源を押した。

苺のゴをうまく発声できないことから、娘は佑香という本名ではなく、いちこと呼ばれている。

いちこは笑顔のない赤ん坊で、あきらめの早い幼稚園児で、ランドセルを校庭に置いて帰宅する小学生だった。

中学に上がる直前に転校したが、新しい学校に馴染めず、いじめにあった。わざわざ他のクラスからやってきてまで「死ね」などと言われた、と聞いて、智美は職員室に怒鳴り込んだ。親身になってくれたのは、いちこの担任の女性教諭だけであった。

保健室登校のち完全不登校になったと同時に、いちこは自分の腕をカッターで刻み始めた。スクールカウンセラーとの面会も心療内科の受診も頑なに拒んだ。赤ん坊のころから、いくらあやしても笑わなかったように。

不登校のまま卒業式を迎え、智美は校長室で、一人で卒業証書を受け取った。力不足を詫げる担任と抱き合っ泣いてから、早くも十年になろうとしている。

実にこの年月を、智美は断片的にしか思い出せないでいる。振り返る道は霧に包まれて、どうやって生きてきたのか、うろたえる。

この間に長女のひとみは、順当に高校から短大へ進学し卒業して、地道な地元企業に就職した。毎朝弁当を作って送り出したことさえ、まぼろしではなかったのかと思うこともある。年毎の家計簿を日々追って眺めれば、食べた物まで思い出せるくらい綿密に記録しているのに。

近頃の智美は、焦りでいら立つことが多くなっている。

あと何年生きられる。残り時間で何ができる。どう生きられる。自分亡きあと娘二人は、特にいちこは、どうやって生きてゆくのだろうか。智美の父が遺してくれた家をやりくりできるのだろうか。思うほどに焦りが募り、不安の振り幅は増幅して、やり場のない怒りにまみれる。

数時間残っていた有給を消化するために時間休を取り、智美は勤務する支所の福祉課で順番を待っていた。月末が近くなり、どの課も込み合っていた。

色あせた金髪をかき上げながらカウンターに座る若い母親を、智美はぼんやり眺めていた。危ない手つきで抱かれている赤ん坊は、ほやほやと湯気がたちそうな新生児で、まだお七夜も過ぎないのではないかと見られた。

—…それでえ、生まれる前に離婚したんでえ—

向き合う職員に語る途中で、若い母親はいきなり盛大に舌打ちをした。

「やっべ、こいつクソしやがった。ああもー、サイテー」

職員に案内され、若い母親はスリッパの底まで舌打ちさせてベビールームへ去った。智美の手のひらは、いちこのべとつく髪を思い出していた。

智美の番号札が呼ばれた。馴染みのある顔が、子育て支援係のカウンターから手招きをしていた。

「須田さん、今日はお休みなんだ」

彼女は智美と同じ臨時職員で、給湯室で一緒になることがよくあった。

「有給もらったの。あと少し残ってたから」

「また、履歴書を出すでしょ。次は同じところで働けるといいな。須田さん、仕事できて頼もしいし」

「私みたいなおばさん、また使ってもらえるかな」

「もらえるもらえる、だいじょーぶ。年齢関係ないもん。ああいう人だって勤められるんだから」

あごで示した視線の方向に、女性の背中が見えていた。派手な衣装はカウンターからもよく見える。近頃臨職の間で話題になっている新人だった。机の下で組んだ足は人も刺せそうなピンヒールだ。面接のさい、臨時職員の心得を係長から聞かなかっただけ。聞いていたとしても“市民に疑問をいだかせる姿”ではないか、顧みることなどないらしい。指に髪を巻き付け、螺旋にねじっては離すを繰り返す。夜の街なら豪勢なものも結構だが、そのぐるんぐるんに巻いた明るすぎる髪はいかがなものか。

「午前中に頼まれた仕事をまだやってないの。本当に、何しに来てるんだか」

だから甘いついていうのよ。智美は腹のなかで毒づいた。ああいう勘違い女でも五十を過ぎたおばさんでも事務職に使ってくれるのは、こういった公共機関だけだ。

「議員の親戚だかお偉いさんの娘だか知らないけど、誰も何も言わないからってやりたい放題なの」

小声だが懸命に訴えてくる。

あんなふうに、好き勝手やっても誰にもなにも言われたい人生なんて、どれだけ楽しいだろうと思う。

朝はいちばんに出勤し、大きなやかんに湯を沸かし、各係のポットに入れておく。掃き掃除をし、机を拭いて回る。ゴミ出しだっけいつの間にか智美の仕事になってしまっている。誰に言うことでもないし、褒められたくてやっているのではないけれど、報われない気分は常にある。損してばかりだと思う。母の呪いのひとつが蘇る。

「あんたは生まれが悪いから」

容姿が要領が頭が悪く、ついでに結婚運も悪いのは、悪い生まれ方をしたからだと決めつけられてきた。誰のせいでもない。母の世界では、ただ一直線に智美が悪いのだ。そして人と人の間には、どうにもならない格差が厳然として存在するのだ。

だが悪口に同調している暇はない。智美は用件を伝え、担当者を呼んでもらった。

長女が私立高校に進学が決まったとき、市から母子寡婦福祉資金を借りた。ときに遅れたりしながら払ってきたが、智美は今日、ついに最後の支払いに階段を上ってきたのだった。

ご苦労様でしたの声とともに領収書を渡されて、智美はカウンターを離れた。待合のソファに、ほやほやを抱いた乱れ髪が帰ってきていた。

階段を下りてドアを出る。隣の中学校の校庭では体育祭の練習が行われていて、ちょうど吹奏楽部が校歌の演奏をはじめたところだった。

いちこは、体育祭も文化祭も、修学旅行にも思い出がない。

作れずに失われた思い出を、智美の母はいつも、かわいそうにかわいそうにと悔やむ。あん人がもっとしっかりしとったならと、孫たちの父親を嘆く。

道路沿いのフェンスから校庭を覗く、保護者と思しき女性たちの脇を足早にすり抜けて、角を曲がった。コインパーキングに停めた車に乗り込むと、智美は乱暴にドアを閉めた。

弁当に詰めるおかずの熱が抜ける間、智美は夜明けの遅くなった庭先に下りた。薄いコーヒーを飲みながら塀越しに向かいの工事現場を眺めるのが、朝の日課になっていた。現場敷地には資材が積まれ、ビニールシートに覆われている。早くも工事関係者と思われる車が数台入って、凶面を広げる作業服も見えた。

素人目にも、横長の基礎は頼りない印象があった。ひとくちコーヒーをすする。集合住宅でないとすれば、何ができるのか。駐車場になるであろう面積がやたらと広い。もしかすると。智美は台所に戻り、手をかざしておかずの冷め具合をうかがった。

近所の病院がデイケア施設を作っているのではないか。ちょっとした飲食店かもしれない。どこかの社長さんの豪邸かも。広い広い庭付きの。

豪邸か。溜息が漏れる。気付けばよく、溜息をついている。あのとき家を建てていたら、今も誰一人欠けることなく暮らしていただろうか。冷えたコーヒーを一気に飲み干した。

自分用とシルバー人材センターで紹介された仕事に出かける母用と、それぞれおかずを詰めてゆく。

二世帯住宅の計画が出たのは、いちこが小学校低学年のころだった。父は元気で、夫とは冷えておらず、智美はまだ子どもを産める年齢だった。婿がマスオさんになるのは向こうの親に申し訳ないと父が嫌がらなければ一。智美は飯に梅干しをねじ込んだ。

長女はともかく、いちこを思えば死ぬに死ねない気分になる。どうして自分がどうしてわが子が。胸の地平がざわついて、体のどこか末端でスイッチの入ったドミノ倒しが光の速さで前頭前野に到達すると、感情はもう叫びをあげずにはいられなくなる。叫びをあげられないままに、智美は職場のトイレで人知れず泣くことがあった。

卵焼き、大根と人参の皮のきんぴらに塩麴から揚げ。いっそ、仕事など休んでしまいたいけれど。

康一からのメール受信を知らせて携帯電話が光った。

一おはよう。今日は朝から会議です。お互い頑張りよう一。

二つの弁当をハンカチで包み終えるころ、母がトイレに立つ気配がした。朝の茶の用意はできていた。

中学を卒業した後も、いちこの自傷は長く続いた。夏場には傷が熱を持って膿み、たまりかねて外科を受診したが露骨にいやな顔をされ、ひどくみじめになったのを覚えている。

智美の職場に電話を架けてきて、自分しかいない家で自分の悪口を聞いたと訴え、虚空に人影を見たときと騒いだ。そのたびに早退して家に戻るを繰り返して、智美は何度も仕事を失った。

姉のひとみに素気なくされたり、智美が体調不良で伏せたり、祖母から口煩く言われるたびに傷を増やした。たまにキレて手あたり次第に物を壊し、叫んで暴れて壁に穴を開けた。一人になりたいと、ひとみは就職とともに家を出て行った。いつも暴風雨だった。

晴れたり降ったりは何年かが過ぎるうち、病院通いが定着し、就労支援施設で働き始めるうち、いちこの腕に新しい傷が増えることはなくなった。

生活訓練施設へ入所する話が出たのは、昨年暮れだ。いちこはしきりに、自立したいと繰り返すようになっていた。担当医はじめ方面に相談し、この夏、まずは入院となり、起床就寝ほか日常生活がきちんとできるかどうかの見極めを踏まえたうえで施設に入所するという計画が組まれた。創作や園芸、カラオケやミニバレーといったデイケアのプログラムにも参加するようになった。

幼稚園で、母の日のプレゼントを作りたいと材料を配られたとたん「できない」と叫んで投げ出して困らせていた問題児が人生最大に頑張っているが、高じた無理は夜中のメールや電話になって智美を悩ませている。

「不安で眠れない」

日付が変わって数十分が経っていた。枕元の目覚ましは、朝五時半にセットしてある。勘弁してくれよと頭をかいた。

「いろいろ考えて。こんなんでも私、生きていけるのかな」

毎晩同じだ。

「お母さんがいなくなったら、どうやって生きていけばいいのか考えたら、眠れない」

遠く、救急車のサイレンが響いている。

「いっちゃんは今、自分でちゃんと生活できるようになりたくて病院にいるんだよね」

乾いた口で慎重に言葉を選ぶ。入院も二か月が過ぎ、そろそろ施設入所の話も出てくる頃だ。本気で自立したいなら、させたいのなら、親も子も正念場だ。

「デイケアにだって参加できてるじゃない」

「そうなんだけど」

声のトーンが落ちる。来るぞ、と智美は眉間を指で伸ばした。

「明日のデイケア、行きたくない。つか、家に帰りたい」

ここ数日、やたらと訴えていることがあった。

「あのひと、やっぱり私だけ無視する」

食堂で一緒になる若い女性と親しくなった。だがいちこがデイケアに参加するようになると、彼女は急に挨拶もしなくなった。ばかりか、あからさまにいちこを無視するようになったらしい。

いちこには友達がない。自分にはできないのだと、決めてかかっている。就労支援施設でも、年齢の近い女の子と仲良くはなれても、時期がくればいちこのほうから距離を取った。連絡すればと勧めれば、「私なんか友達だと迷惑だろうから」などと高い壁をこしらえる。

「あのさ、失礼なことを言うけれど、あなたの周りの人たちって、普通の社会生活を送れる人たちだっけ」

「違う。できないから入ってる」

「あなたより、もっと具合の悪い人だって大勢いるよね」

「いる……。うん、いっぱいいる」

戸が開いて、夜の中から母が顔半分を覗かせた。いちこか、と口パクで問うから、智美は心配するなというように手で合図を返した。だが母は、布団の足元にちんまり座り込んでしまった。智美は続ける。

「いろんな人がいて、具合がよくなったり悪くなったりが、自分ではどうしようもない人だっているんだよね。その人だって、明日になればまた、挨拶してくれるかもしれないよ」

「だって私だけ無視するんだもの」

キリがない。「早く寝らんと明日の仕事に障るが」と母が小声で言うから、智美は口の人差し指を当てて見せた。

「いっちゃん、お母さんはその人のことを知らないから、あなたが納得できることを言えないのかもね。ナースステーションに行って、だれかに話を聞いてもらったらどうかな」

「いいのかな。迷惑じゃないかな」

迷惑ではなかろうかと繰り返しながら、いちこはやっと電話を切った。夜中のナースステーションに直訴して解決しようはずもない。だが、親亡きあとを心配して眠れないくらいなら、いっそ他人に頼ることを覚えてくれまいか。

一人に戻った後、水で喉を潤して智美も布団に体を吸い込ませた。親亡きあと、私がこの世を去ったあと。

考えようとする間もなく、轟と眠りに入って行った。

メールが入ったのは、女性たちが昼休憩に使う四階の和室に向かうエレベーターの中だった。業務の関係で、智美の休憩はその日、一時半からとなった。正午の休憩室は、広い和室が満席になる。いつもは食べ物や化粧品の匂いで華やかなのに、今は智美のように休憩の遅れた者数人が、携帯電話に額を埋もれさせて、しずしずと箸を動かしている。畳の上に寝転ぶ姿もある。薄日が差しているが、天気は西から下り坂だ。台風の影響が出始めていた。

弁当の包みを解いたときまた一人現れた影に向かって、智美は反射的に会釈をした。顔のつながりを作っておけば次の仕事ももらいやすいと、同僚が語ったことがあるからだ。智美の会釈に、向こうも浅い笑顔を見せて壁際の席に正座した。あとはお互い、ご自由にどうぞ、だ。ざっと手を合わせて弁当を突きながらメールを確かめる。智美がよく利用する古道具屋からの、開店記念セールのお知らせだった。店主は静かで無口で、インドの寺にいるヨガの達人みたいな若い男性だ。インドに行ったことはないしお坊さんがヨガをやっているか知らないが、窪んだ目元がそういう印象を見せていた。

康一と出会ったのは去年の春先、この店だった。智美はそのころ無職で、職安通いをしていた。

前日仕入れに行ったものでと店主が言い訳をするとおり、狭い店には表の歩道にまで段ボールや古い箆笥や椅子が積まれていた。その中を先に来ていた康一と後から入った智美とで、ぶつかり合わないよう譲りながら眺めていた。

「よろしければ、お茶をどうぞ」

窮屈さが心苦しかったようで、ヨガの達人、もとい店主から声がかかった。出てきた紅茶は香辛料入りで、添えられたパイ菓子はカレー専門店の香りがした。やっぱりヨガの達人だったかと、智美は思った。

康一はブリキのおもちゃを探していた。首都圏在住のビジネスマンだが、まとまった休みが取れると日本全国の古道具屋や昔ながらの玩具店を回るのを趣味にしていると語り、お宝の写真を見せてくれた。

智美はその日、職安に出かけたついでにただなんとなく店を訪れたのだが、運よく見つけたものがあった。ハウロウの古い漏斗で、柄に握りが付いている。風情を感じ、手に入れたくなった。財布に優しい価格と知ると、即購入した。康一はほのぼのと言った。

「ハウロウはいいですよ。ブリキもいいけど、ハウロウもいい。僕は放浪癖で困ったものですが」

漏斗を新聞紙に包んでいた店主が声をあげて笑うのを、智美は初めて聞いた。

康一は、近くに座っていて居心地が良かった。悪い人じゃないなと感じたから、インターネットで調べた店を回るが一緒にどうですかと誘われて、道案内を買って出た。その日は就労支援施設に出かけたいちこが帰宅するまで、まだ時間はたっぷりあった。

車で市内を案内しながら、互いのことを語り合った。彼が独り者だとわかったので、お礼にと早めの晩御飯に誘われると、遠慮なくご馳走になった。

翌日も待ち合わせて今度は観光案内をし、夜は島唄の流れる居酒屋で、黒豚の炭火焼きやキビナゴの塩焼きを着に焼酎を飲んだ。酒がどれだけ入っても、康一が適切な距離を

保ってくれたのが、智美には嬉しかった。人を大切に思っている人だと思った。以来、メールが続いている。ハウロウの漏斗は麻紐で吊るして玄関にぶら下げ、ドライフラワーを飾っている。

土曜日の午前中、店に行ってみようか。早起きをすれば、いちこが外泊の迎えに来いと言ってきても間に合うだろう。

休憩時間も終わりかけていた。そうだったと思い出し、昨夜はどうだったか、看護師に話を聞いてもらえたかを訊ねるメールをいちこに送ってみた。だが、歯磨きをしているときに返ってきた内容に、智美は怒りのあまりに呆然とした。

「眠れるお薬を渡されただけだった」。

なんだよ、それ。ろくに話も聞いてやらずに、面倒臭い患者は薬で眠らせようってか。苦情を入れようと病棟の電話番号を押しかけて、智美は声なく叫んでトイレの鏡の前でうずくまった。ここで堪えなければ、目をつぶらなければ。後退だけは避けなければ。ここを逃せば、いちこの自立は遠のくばかりだ。眠たいがためにいちこを突き放し、病院の判断に委ねたのは自分ではないか。

大声で叫びたい衝動にようやく堪え、タイルの床を拳で殴った。

母は暇さえあれば、同級生でチームを組んでいるグラウンドゴルフの練習へ行く。配偶者を亡くした人、生き別れた人、子の出世や孫の数を争う人、ずっと一人を通した人。七十歳を幾つか過ぎて、とりあえず元気な人が集まる。母がよく話に乗せる幼馴染のあっちゃんも、心臓で倒れたが持ち直したご主人の送迎で参加したそうだ。

「それがね、あっちゃん、ゴルフとなるとすごい勢いで走るのよ。背中なんかもう、こんななのに」

テーブルと平行になるまで、笑顔で体を折る。

一人息子は一流の大学を出て一流の会社に入り、一流のお嫁さんを迎え、都会でマンションを購入して幸せに暮らしている。と、ここまではあっちゃん自身が語る話。

一人息子は田舎を嫌うお嫁さんに遠慮して、親元に帰って来ない。帰ってくるときはいつも一人で、実家ではなくホテルに泊まる。と、これは他の同級生が母に聞かせた話だそうだ。

「あんん気が強か。嫁さんに好かんことを言うのかも」

でも、私は幸せ、私は大丈夫。だって、娘と一緒にいてくれるから。カステラを頬張り、紅茶をすする。そういえばと、奥歯に絡まった生地を人差し指で探るのを見て、智美はひそかに洗面を作った。

「あんん人は、次はいつ来るのね」

元夫の名前が出た。カステラは彼の母の旅行土産で、先週宅配便で送られてきたものだ。一筆箋に彼の字で、そのうちまた顔を見に行くから、の短い文が添えられていた。良くしてくれるのは、あんたに未練があるからじゃないよ。子どもたちが可愛いから、なんだからね。

左右に動かす口のなかで、紅茶が揺れている。

「にこにこ愛想よくしておかんと。来たときだけでいいんだから。機嫌取っておいて損はしないんだから」

智美が適齢期になると、母はしきりに見合い話を持ってきた。私と違って、あんたは自分では相手を見つけられないだろうから。あちこち頼んで回るのを、父にたしなめられたこともあった。

地味で異性にもてない、出会いを得られないと騒いでいたが、娘が旧姓に戻ると今度はそれが、母には保険になっている。女の魅力に欠けるうえ、障がい者を子に持つ娘などに次の縁があるはずがないと。老いた身にとってはもう、智美に最高の良縁などあってはならないことだった。

ポットの湯を足しに立ちながら、智美は深くなっているに違いない眉間を赤くなるくらい擦った。

律儀なことに例の古道具屋は、康一にも開店記念セールのご案内を送ったようだ。連休を利用して遊びに行こうかという旨の、今朝入ったメールが、母の言葉と天秤になって上下していた。

夜勤明けの寝ぼけ眼をこすりこすり、若い看護師が通用口から顔を見せたのに向かい、智美は丁寧に頭を下げた。台風は大幅に予想進路を外し、湿った強風を残して東シナ海に抜けた。

残暑も過ぎてようやく涼しくなったことから、智美はいちこに、薄手のカーディガンを持参したのだった。提げた紙袋には、新しく出た漫画も入っていた。

病棟は面会時間が厳しく制限されていて、仕事をしている平日には会いに来られない。それで早朝に駆けて来たが、荷物を預けることはできても、娘に会うことは許されない。「お顔を見たいでしょうけど」

申し訳なさそうに言われると文句も出ない。

「食事もしっかりと取れてますし、ずいぶん落ち着いてらっしゃいますよ」

素直で礼儀正しい娘さん、というのがナースステーションでの評価だ。

紙袋を渡すと看護師はわずかに中を覗き、カーディガンと漫画ですね、と智美と目を合わせた。外部から持ち込む品物は、全部チェックが行われる。「そうです」智美はきっぱりと答え、よろしくと頭を下げた。厨房の方から、炊き上がった飯の匂いがした。

智美は暗い空が吹かす風に押されて車に戻った。出勤時間を気にしながら三階の、駐車場に面したいちこの部屋を見上げていると、カーテンが激しく揺れるのがわかった。

窓ガラスはすべてマジックミラーで、外部から室内を見ることができないようになっているが、外部が暗くなると、わずかに部屋の様子を知ることができたのだ。

看護師から荷物を受け取ったのだろう。まだ駐車場にいる母親に、ここにいるよとカーテンを振っているに違いない。ポケットで携帯電話が震えた。

「お母さん、ありがとう」

メールには、笑顔の顔文字が付いている。智美は唇を噛んだ。笑ってなんかいないだろうに。泣きながらカーテンを揺らしているくせに。

今すぐ、連れて帰りたかった。そして懐からけして出さず、風や雨に打たせることなく、食べたいものを食べさせて、全力で守ってやれればと願った。

震える指でメールを返した。

「カーディガンを開いてごらん」

丸めたカーディガンの間に、握り飯とゆで卵を忍ばせてきたのだ。味気ない病院の食事に、あの食いしん坊が満足しているはずがなかった。風巻く空の映る窓辺で、吹き荒れるがごとくにカーテンが揺れた。

あっちゃん

---

「雨が歩いてるよ」

掃き出し窓から表を眺めていたいちこが、台所に声をかけてきた。

「よく降るね」

智美は夕餉のしたくの手を止めて、いちこと並んで窓辺に立った。一間大に切り取られた紫とオレンジの空から、しっかりと形のある雨粒が道路に規則的に降り注いでいる。なるほど、歩いているように見えるねえ。感心すると、いちこはそっと智美の手を握りしめにきた。柔らかい手だった。

植え込みから見えるにぎやかな灯りは、通り向かいの工事現場のものだ。あれがまさか、コンビニエンスストアになろうとは予想外だった。

「いつ開店するのかな」

「ああいうお店は、箱が出来上がればあとは業者さんがわあっと荷物を入れて、はいオープン、だもんね」

「便利まっしぐらだね、お母さん」

駐車場の真新しいアスファルトが、雨粒を弾いて光って見える。湿度のあがったりピンングで、花が香った。先日職場を離れるさい、同僚に囲まれて送別の言葉とともに贈られた花束だった。晴れて無職。すぐにでも働きたいが、一年勤務したおかげで失業給付金が受けられる。少しゆっくりしたいと思っていた。

「婆ちゃん、遅いね」

母は午後から元気よく出かけて行った。例のお仲間たちとカラオケ大会だと聞いている。夕食を済ませてくるなら連絡があってもいい頃だ。さっき電話を入れてみたが、出なかった。

まさか事故、それとも具合を悪くして倒れたのではないか。智美はつい、母の軽自動車が跡形もなくつぶれている場面を想像した。最悪の場合、警察か病院から連絡があるはずだ。同級生と乗り合わせて行くと言っていたから、誰かが知らせてくれるはずだが。住所録を頼りに、母の同級生に電話を入れてみた。

何人か目で行き当たった参加者の話によれば、母は方角の同じ男女二人を乗せて、みんなと別れたらしい。

男性のほうは妻を亡くした裕福な年金生活者で、酒も煙草もやらない紳士でと、余計な話まで聞かされた。

次に電話をかけようとしたところに、車が帰ってきた。勝手口を飛び出して行くと、母が困り顔で降りて来た。右手にはバッグ、左手には泥付きジャガイモのビニール袋だ。雨

は頼りなく細くなって降り続いていた。

「ただいまただいま。あら、いっちゃん、帰ってきてたね。おかえりおかえり。ああ、えらかこっ」

豚の生姜焼きを食べていたいちこの頭をせわしなく撫で、洗面所へ向かったが、そこでも「えらかこっ」を繰り返している。上着を脱ぎながら戻ってきて、今度は参った参ったの連射が始まった。そして味噌汁をよそう智美のそばへ来て、声をひそめた。

「あっちゃんが、万引きで捕まってねえ」

男性を先に送り届け、次に送った女性の家でジャガイモを持って帰れと言われて待っている間に、覚えのない番号で電話が鳴ったそうだ。智美は叱った。

「知らない番号には出るなって、いつも言うでしょ」

「だって、シルバーから、仕事の電話かもしれんし」

土曜の午後に働くお役人がいるものかと半畳を入れる隙も与えず、母は箸と口を動かし始めた。

「百円ショップで、口紅をポケットに入れたのよ。つい魔がさしたっていうけど、そりゃみんな、出来心でやるんだろうから。三億円盗むならともかく」

あっちゃんは、警官に向かって夫には知らせないでと懇願していたそうだ。心臓が悪いんです。死んでしまいます。気の強い人が、泣き叫んでいたそうだ。

「それで私を呼んだらしい。あん人は口が堅かてって」

人選が的確だったのかどうかは分からないが、母は案内、家の外では違う人間なのかもしれない。

「百円くらい、持ってなかったわけじゃないでしょうに」

「だからよ。でもね、ほんのちょっとの年金だよ。自分を飾るものなんか、思うようには買えんよ。私だって、辛抱するほうが多かからね」

「なにかあったのかもね、おうちで」

しゃもじで炊飯器をこそぎながら、いちこがつぶやいた。お母さん、ご飯全部食べていい。聞く間にもお椀に盛られた飯をしゃもじで叩きのめして、追加の場所を作っている。

「そうそう、息子から、孫の誕生日の写真が送られてきたんだって。ご馳走やらケーキやら並べて。嫁さんなんかこーんな大きなイヤリングを着けてたって」

母は憎らしそうに、親指と人差し指で丸を作った。

ようやく解放された幼馴染を、母はファミリーレストランに連れて行き、ケーキと

紅茶で落ち着かせてから家に送ったそうだ。あっちゃんは膝に額がつくほど礼を述べ、母はもらったジャガイモを半分置いてきたと語った。

「あの人、ときどきちぐはぐなことを言うようにもなってきた。歳を取れば誰だってしかたなかけど」

箸を置くと、また奥歯に指を突っ込んだ。

「哀れは語い取らん」

化粧の乗らなくなった頬が疲れていた。風呂を勧めると、今朝より萎んだように見える身体をだるそうに起こし、風呂場に向かおうとしていちこの頭に手を置いた。

「いっちゃん、変な話を聞かせてごめんね。婆ちゃんは大丈夫だからね。まだまだ頑張れるからね」

いちこは黙って智美を見た。祖母と母親を交互に見て、ゆっくりと溜息をついてから諦めきれない顔で飯茶碗を置くと、食後の薬に手をかけた。

日曜日の午後になると決まって、いちこは不機嫌になる。病院へ戻りたくない気持ちは理解できるが、ゲーム機のコントローラーを乱暴に扱ったり、肩を落として溜息を量産するのには智美は閉口した。さらにその様子を見て、母がなだめるつもりか笑う。場を和らげるためだであっても、笑いの質がいちこにはお気に召さず、またしても盛大な溜息を連発するのだ。

明日またデイケアだからと声をかけるのも気が引ける。お母さんは何を毎日何をしてるのかと訊かれると、無職を責められているようで、智美はつらかった。

「お友達もできたでしょうが」

母は荷物をまとめているところへ行って、藪をつつく。

「友達なんていない。私には友達なんか一人もいないし」

「そんなことないよ。いっちゃん可愛いし」

「可愛いくない」

「お母さんの子だがね。可愛いよ」

「嘘つかなくていいから」

声色が次第に殺気だってくるのを、智美は台所で聞いていた。菜箸で土鍋を突く。肉にはまだ火が通らない。リビングの時計を見ると午後五時少し前で、表はまだ明るすぎるくらい明るい。網戸の向こう、庭木の間から、向かい側の看板がきらめいているのがよくわかった。

開店間近のコンビニには白いブラインドが下ろされ、多色刷りの派手なポスターが張り巡らされ、業者らしい男女がひっきりなしに出入りしている。

智美は時間が過ぎるのを待っている。ただ肉が柔らかくなるのを待つでなく。白菜は透明になってきた。母はまだ、孫に何やら声をかけているが、いちこは完全にむくれてしまっている。だがどんなにむくれても、無視せずちゃんとうなづいている。

智美は母に、茶碗を出すように頼んで火を止めた。首筋を汗が伝う。運動会シーズンも終盤だが、今日は気温が高かった。真夏でもいちこは鍋料理を食べたがる。昆布だしに鶏肉、糸こんにゃくとちゃんぽんをたくさん入れて、ポン酢で食べるのが好みだ。

夕食を食べ終わる頃にはようやくいちこの覚悟も定まって、黙って荷物を玄関に運び始める。

「自分のためだもんね。お母さん、私、頑張るからね」

「頑張っているよ。いっちゃんはすごく頑張っているよ」

玄関の灯りのしたで、いちこの手に千円札を数枚、握らせてやる。

「こんなにもらっていいの？」

「よく考えて、大事に使ってね」

病院に併設の売店で買い物をするのを、いちこは楽しみにしていた。そろそろ切れるはずの生理用ナプキンも購入しておくよう言い足して、智美は靴を履いた。玄関の時計は午後六時半。病院に戻るには余裕だが、智美が気になっている場所にはもう、間に合わないだろう。間に合わない理由をつけるために、智美は時間が過ぎるのを待っていた。

見送りに出てきた母が、いちこが手を振ると思い出したように車の窓を叩き、窓を開けさ

せた。

「忘れんでよかった。はい、これ。お小遣いね。売店でアイスでも買いなさい」干支柄のポチ袋を差し出した。

「いいの？婆ちゃんにはあるの？」

「あるある、銀行にいっぱいあるから大丈夫」

ナースステーションで荷物のチェックをしてもらい、カードキーで部屋に入ると、いちこはさらに違う顔になる。電話やメールはなるべく我慢するからねと、歯を喰いしぼり、覚悟を決めた囚人みたいに肩が上がる。いちこの背景になっているマジックミラーの先はもう、容赦のない宵闇で、映し出される自分の姿に智美は愕然としてしまう。

あの女は誰だ、安っぽい服の。老いて疲れたあの女は。娘を置いて去ろうとしている女は誰だ。

「お母さんは仕事もしてないし、いつでも電話やメールしていいんだよ。用があればすぐに飛んで来るんだから」

「でも、あまりお母さんに苦勞かけちゃいけないから。我慢強化週間にするよ」

首に腕を回して肩を抱く。子どもの頃もこうしてあげていただろうかと思う。時間を何年分巻き戻せばこの娘を、世の中で大手を振って胸張って歩けるように、せめて姉のひとみと同じくらい、普通の生活ができるよう育て直せるのだろうか。いちこの手のひらも、智美の背を撫でている。慰めるように、いたわるように。

揺れるカーテンに見送られて駐車場を出た。

街道を、家とは反対の方角へ向かう。母には書店に寄ると言って出てきた。あんたもたまには外でお茶でも飲んできなさいと見送られたが、智美が車を走らせたのは、例の古道具屋だった。

とうに閉店時間だと思いながら走ってきて、フロントガラスに照明の落ちた看板が見えたときは、やっぱりと思った。がっかりしたような安心したような、でもやっぱりどこかほっとしていて、店の駐車場で方向転換させてもらおうと更に進んだとき、通りの角に二面が開いたうちの一方から灯りが漏れていることに気付いた。黒い人影が、ちかちかと何かを光らせている。

ビールを片手に線香花火を握っていたのは、康一だった。智美は確かに、来なければよかったと後悔していた。

康一はすっかり意気投合した店主と、ビールを飲みながら花火に興じていたのだった。仕事の都合で日帰りになりそうだ、とメールに書き送ってきていたが、なんとか調整し、復路の飛行機を明日の昼前まで延ばしていた。

「せっかくだから、あなたの顔を見て帰りたくてね」

うふふ、と優しく笑う。都会の人だ、と智美は思う。

最後の線香花火が灰になると、康一は店主に再会を約束して立ち上がった。店主は窪んだ眼を柔らかく細めて、智美と康一に「またのお越しを」と頭を下げた。二人は肩先の距離を微妙に保ちながら、無言で海岸の方へ歩き始めた。車はコインパーキングで留守番だ。康一がおもむろに口を開いた。

「わざわざ来た甲斐がありましたよ、開店記念セール」

小ぶりのポストンバッグを探って取り出したものは、ブリキの消防自動車だった。

「乾電池式でね、梯子もちゃんと動くんですよ」

手のひらで走らせる。じん、と古錆びた音がした。

「親が遺した家財道具を始末したいから、って頼まれて出向いた農家で見つけたそうです。まだまだあるんだなあ、こういうものが」

タオルに包んでバッグに仕舞う。

視界が開けて、カーフェリーの発着所が見えてきた。一帯は広大な埋め立て地で、海に突き出した形で芝生を敷き詰めた公園が広がっている。緩やかなカーブで縁取られた公園の前にはパームツリーが茂る複合商業施設があって、レストランや土産物や地場の物産を販売するテナントが多く入っている。そのひとつが、康一と酒を飲んだ居酒屋だった。

「もう、博物館をやれるくらい集めたんじゃないですか」

「それは横浜にあるしなあ」鼻で潮風を聞いている。

「“人形の家”でしたっけ」

「それとはまた別なんですがね。うん。そうだ、僕は集めて楽しむしか能がないだろうから、僕が死んだあとは智美さん、あなたにお任せしようかな。ネットオークションで売れば、ちょっとした遺産になるかも」

信号は青なのに、康一は歩きださずに智美を見ていた。智美は目を合わせるのが怖くてうつむいた。来なければよかった、の正体がこれだった。

「開店記念セールは口実でしかなかった。僕はどうしても智美さんに伝えたくてね」

行き場を訊ねるような笑顔を向けてくる。智美は本当に困った。こういうときに気の利いたセリフが出てくるような女なら、母が娘の見合い相手を探して東奔西走することもなかっただろう。

業務連絡さながら、康一はこまめにメールを送ってきていた。ブリキのおもちゃを探しにあちこち出かける旅先から、名所旧跡の写真も送ってくれた。同居の母の健康も、気にかけてくれていた。

メールに互いの将来についての記述が加わるようになったのは、別れた妻について行った康一の息子が結婚し、初孫を連れて遊びにくるようになった春頃だった。

—これで、親としての責任はすべて果たせた気分です。これからは自分の人生だけを考えてゆきたい—。

孫を抱いて破顔する写真が添えられたメールに、決意が表れていた。

「飲みに行った店で、隣のお客が具合悪くなったでしょう。その場で戻し始めて。同席の若い子たちがきゃーきゃー騒いでるのに、智美さん、自分の服が汚れるのもかまわないで介抱してあげた。あのとき、すごい人だなあって感心したんですよ」

湾内を二十四時間体制で行き来するカーフェリーが入港してきた。電飾で彩られたデッキはパレードの様相だが、通勤通学時間もとうに過ぎた時間では、華やかさが逆に侘しさを募らせる。

「僕のところに来てもらってもいいし、定年後、僕がこっちに来てもいい。結婚とか、堅苦しく考えないでください。僕は、あなたがそばにいてくれたらと思うんです」

親を看取った一人っ子で、うるさい親戚もいない気軽な身というのは聞いている。だが智美には、遠くない将来に介護が必要になるであろう母がいる。なによりも、いちごがいる。

娘が障がいを持つという話は、していなかった。友人でいるなら話さずに済むことも、状況が変わった。この男に自分という不良債権を全部しよい込むだけの気概があるのか。聞いてみたい。でも、怖い。

何も言わないのは卑怯だと思ったから、智美は時間をくださいと答えた。よほどずるく思われたが、即答できるものではなかった。

「僕も定年まではまだあります。考えてみてください」

よろしくと、分厚い両手で手を握られた。きっと仕事で契約締結の書類を交わしたときにもそうするに違いない。続いてこわごわと顔が近づいてきても、智美は映画のように相手の首に腕を回すこともできなかった。

次のフェリーが光を曳きながら出て行った。月のない海の向こう岸は、ただひたすらの黒だ。帰りが遅くなるのは嫌だなと、それだけを考えていた。

いちこの、生活訓練施設への入所が決まった。

担当医から説明を受け、病棟担当者と施設責任者との面会もあれよと言う間に済む。急すぎる展開にいちこは尻込みする姿も見せたが、動くときには動くのだ。いつまでも入院したいかの問いに、いちこは激しく頭を横に振った。

忙しくなった。施設では自炊しなければならない。智美は担当者との面接を終えた足で家電量販店やホームセンターへ走り、メモをもとに買い物して回るようになった。他に、当面の米や味噌醤油などの食品も買っておかねばならない。備え付けのベッドはあるが、布団やリネン類は自分持ちだ。シーツやタオル、枕カバー。施設からデイケアへ通うために、服も多めに準備したほうがいいだろうか。あたふたと走り回るうちに、とうとう退院入所が明日となってしまった。

怖い怖いといちこは怯える。病院のデイケアには施設の入所者も参加している。顔見知りがないわけでもないのにやみくもに恐怖を訴えてくるので、智美はいっそ、一度自宅へ連れて帰ろうかと考えた。

「ううん、いい」

連れて帰るというのに、正直本人も望んでいるだろうに、いちこは予定変更をしなかった。

「おうちに帰ったら、いつまでたっても進歩がないし、お姉ちゃんにも迷惑かけることになるし、将来的に」

決意表明は立派だが、肩は内側に入り、固く組んだ手は小刻みに震えている。

「あのね、お母さん」

「なに」

「電気炊飯器だけど。リサイクルショップのじゃなくて、新しいのを買ってもらっていいかな」

入所に向けて、出費がかさんでいる。正直なところ、智美は中古品で済ます心づもりだった。

「いいよ。いっちゃんのご飯が大好きだもんね」

病室内はもう、あらかた片付けてある。不要になったものを車に積み込んで、智美は病院を出た。

カーテンが揺れるのが見える。あれを見て胃が縮むような思いはこれが最後であってほしいと願わずにはいられない。智美は窓に向かって大きく何度も腕を振った。炊飯器を買いに行こうと決めていた。

ひとみが家に帰ってくるのは、久しぶりのことだった。休日は友達と遊びに出たり習い事をしたりと楽しんでいる様子だ。子どもの頃から友人は多かった。

「へえ、旅行行ったんだ」

湯を沸かす間に、土産を仏壇に供えていた。

「お母さんも行けばいいのに。長いこと行ってないでしょう、旅行。どこに行きたい？」

智美はちょっと考え、大陸の端にある国名を答えた。

「なんでまた、そんな辺鄙なところに。お母さんって変なところが好きだよ。変なものも好きだし」

ひとみは首を回すと、部屋のあちこちに置かれたハウロウ製品を指さし「ハウロウ癖か」と笑った。どこかで聞いたような駄洒落だった。

「紅茶、淹れようか」

「あ、私やるよ。お母さんはお土産を開けて。仏さんはもう食べただろうから」

仏壇から菓子箱を下げて戻り、何気なくひとみを見た。一瞬あれ、と思ったが、黙って腰を下ろした。

「それ、和風のロールケーキなのよ」

「黄な粉入り大納言小豆ロール、だって。美味しそう」

取り皿とナイフに茶器をそろえ、ひとみも席についた。家にいる頃は、タテのものをヨコにするのも面倒臭がる俺様な娘だったが、一人暮らしを始めてから目に見えて変化した。だがそれは、一人暮らしのせいだけだろうか、智美はそっとひとみの様子をうかがった。

ロールケーキを一口頬張ると、ひとみは母の顔をじっと見た。

「お母さん」

「はい、何でしょうか」

やばい。ひとみはそういう表情をしている。

「もしかして、ばれてる？」

「何が」

「いや、その。お母さんがそういう返事をするときには、こっちが言いたいことの八割はばれてるから。いつも」

男だな。

さっき感じた違和感はそれだったかと、智美は思った。立ち姿の変化を感じただけで男性の影が見えるなんて。

妊婦のお腹を見ただけで胎児の性別がわかる年齢の女性たちを、智美はかつて鬱陶しく、いやらしくさえ思ったものだ。今や自分がそういう年齢になってしまった。老人力がついた、とポジティブに考えていいものなのか。

「哀れは語り取らん」

「え、何？」

「なんでもない。で、何か話したいことがあるの？」

ひとみはテーブルに視線を落とした。「あのさ」がやっと聞き取れた。

「私、この家と縁を切らなきゃ結婚できないのかな」

「どういう意味」

「いっちゃんがいると、結婚できないのかな」

いちこに与えられ、障がい者年金を受けている病名は、遺伝ではないとされている。治る見込みだってある。治らなくても、社会人として活躍したり結婚して子育てをしている人は大勢いる。

「縁を切るとなれば、結婚式でのあなたの招待客はお友達だけになるね。お産をしても帰れない。家族は助けにも行けない。もしというときには、帰る場所だってない。あなたにしては想像力が足りないんじゃないの。だいたい、それだけの値打ちのある男なの」

ひとみには言いたい放題だ。

「病気の妹がいるくらいで騒ぐような男、婿だなんて認めません」

「やっぱり、そうだよ」

ひとみの目が明るくなった。だって妹だもんという言葉が急速冷凍して、今すぐいちこに届けてやりたかった。

玄関に置いたままだった炊飯器を見るとひとみは、一万円札を無理やり置いて帰って行った。あれだけ姉を意識している妹に、直接渡してやればいいものを。智美はその金を、いちこに渡してやろうと考えた。姉からのお見舞いを、喜ぶ顔を見たかった。

ひとみが一人暮らしを始めたとき智美がしてやれたことは、部屋の下見と保証人欄への記名押印だけだった。もらったタオルや茶碗皿を押し入れから出して選び、てきぱきと引っ越しして行ったもので、初めての子を初めて外に出すにとしては緊張感も寂寥もなく「気抜けした」と母が呆れたものだ。

入院先から移動するいちこの場合は違った。吟味した荷物を箱詰めしながら、智美は何度か、ひそやかに涙をこぼした。母には気取られなくなかった。

空が青い一枚紙に見える日、車に満載の荷物とともに、いちこは施設へ入居した。

使い慣れたものと、新品と中古品。ひとまず運び入れ、施設長から入居にさいしての説明を受けた。契約書にサインをしたらもう、住人としての生活が始まる。荷物を解き、調理道具や食品は台所に割り当てられたいちこの場所へ納めた。身の回り品は室内のクローゼットや棚へ。病院とは異なりカーテンは明るい花柄だ。掃き出し窓から隣家までは距離があり、光は通しても視線は通らないよう目隠しが設置されていた。病院とそれに付随する建物群からは少し離れた静かな田園に囲まれた場所だ。昼はのどかだが、暮ればどれだけ寂しいだろう。どれだけ夜が長いだろう。

「日当たりが良くて景色もいい。お部屋も綺麗だし。いっちゃんは良かったねえ、こんないい所に入れて」

荷物を解きながら母は口を急がせる。いちこがネガティブな言葉を出さないよう、先取りしているように思われた。

冷蔵庫も共用で、食材にはすべて名前を記入し、自分用のプラスチック製の籠に収める。

「ラーメンばかり食べんとよ」

ひやひや笑う母から顔を背け、いちこがこちら側へ顔をしかめるのが智美にはつらかった。

「お母さん、ラーメン食べちゃ駄目かな」

「食べてもいいよ。でも、週に一度かな。身体のためにもお野菜をたくさん入れてね」

「わかった。ごめんね」

こまごまと指示を出す母の傍らで、いちこはうんうんと、雑だがちゃんと返事をしながら片付けを続ける。

「お米は少しずつ買うんだよ。いっぺんに買うと虫がわくから。同級生の、誰だっけ、その人が十キロ買って駄目にしたんだって、夏に。旦那さんもおらんとに十キロ。今年の夏は暑かったから」

話は延々と続く。いちこはもう、初めての台所で夕食の支度を始めなければならない時間だった。母がトイレを借りに廊下へ出てゆくと、いちこがそっと寄ってきた。

「婆ちゃん、超うるさい。なんであんなにしゃべるの」

トイレを探す声にスタッフが気づき、誘導する会話が響いてくる。いちこはカーテンに潜り込んでしまった。

「恥ずかしい」

「ごめんね」

カーテンの上から智美はいちこを抱いた。青黒く光らせて、目だけが覗いた。

「お母さんは悪くないよ。でもなんであんなに声が大きいのかな。黙ると死んじゃうの

かな」

「いっちゃんが心配だからだよ」

余計な寓話にはうんざりだが、話したければ話せばいいのだ。母の幼馴染のあっちゃんみたいに、感情をため込んで万引きなどという形で爆発するよりましだ。

黄色やオレンジの花が飛び交う布の合間から、でたらめな歌が聞こえてきた。母が戻るまで、いちこはカーテンに巻かれてぐるぐる遊んでいた。